

「子育て支援センター まつぼっくり」の歩み History of child-raising support center “Matsubokkuri”

勝美 芳雄*
Yoshio Katsumi

帝塚山大学現代生活学部子育て支援センターは、平成 21 年度、こども学科開設と同時に発足し、今年度末で発足から 7 年が経過する。そして、この度、本誌「子育て支援センター紀要」を創刊するに当たり本センターのこれまでの歩みをまとめておきたい。

1. 子育て支援センターの構想

帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター（以下、本センター）は、本学が平成 21 年度のこども学科開設に伴って構想したものである。このことは、こども学科設置認可申請書に「学科の特色」のひとつとして次のように記載されている¹⁾。

5 地域の子育て支援の拠点としての機能

地域に開かれた大学として、「子育て支援センター」を設立し、地域の子育て支援のための拠点とする。大学内にプレイルームを設け、屋外施設も含めて、地域の子どもたちに開放する。学内において子どもの生活を観察できる機会を設けるとともに、屋外施設で子どもと触れ合う機会を持つことにより、子どもや親とコミュニケーションをとる力が習得できるものと思われる。

「子育て支援センター」は、もともと、厚生労働省（当時 厚生省）通達「特別保育事業の実施について」に基づいて、安心して子育てができる環境づくりをめざして設置された施設の名称で、その事業の実施主体は市町村であった。本学がこども学科設置構想を持った時点は、このような社会背景と大学の地域貢献が求められる時流にあった。そして、平成 16 年、当時の東横学園女子短期大学（現、東京都市大学人間科学部）が、全国で初めて大学構内に「子育て支援センターぴっぴ」を開設した²⁾。

この後、全国では、保育分野を持つ大学が同様の施設を開設することになるが、本学の子育て支援センターは奈良県では最初の開設となり、その後開設された県内他大学との連携が図られるようになる。

2. 子育て支援センターの発足

平成 21 年度のこども学科開設にあわせて新築された 18 号館の 1 階に、子育て支援センターが使用する下記の施設が設けられた。



図 1 保育演習室



図 2 屋外施設「遊びの広場」

*こども学科教授

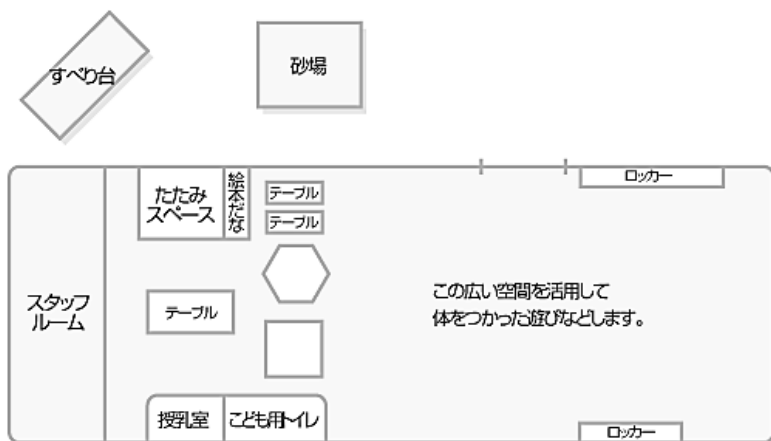


図 3 子育て支援センター 平面図

このように立派にできあがった施設を有効に運営するため、「子育て支援センター運営委員会規程」が以下のように定められ運営委員会が発足した。

年度毎、現在までの運営委員は表 1 のとおりである。

帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター運営委員会規程

(設置)

第 1 条 帝塚山大学現代生活学部に子育て支援センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第 2 条 委員会は、次に掲げる事項を審議し、その運営にあたる。

- (1) 地域住民の子育て支援に関する事項
- (2) 公開講座、学術講演会および研究会の開催に関する事項
- (3) 地域との連携および学外諸団体・研究機関との交流活動に関する事項
- (4) 研究成果の公表・発刊に関する事項
- (5) その他センター長が必要と認めた事項

(構成)

第 3 条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 子育て支援センター長
- (2) 子育て支援副センター長
- (3) こども学科長
- (4) 各学科から選出された専任教員 1 名
- (5) その他子育て支援センター長が必要と認めた本学の教職員

(任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前条第 1 号、第 2 号及び第 3 号の委員の任期は各々がその任にある期間とし、異動が生じた場合には、後任者が委員を引き継ぐものとする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員長は、副センター長をもってこれにあてる。

(運営)

第 6 条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長は、必要に応じて、委員以外の教職員に委員会への出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第 7 条 委員会の事務は、教学支援課（現代生活学部）が行う。

(改廃)

第 8 条 この規程の改廃は、教授会の議決によりこれを行う。

表 1 子育て支援センター運営委員（敬称略）

（食…食物栄養学科、居…居住空間デザイン学科、こ…こども学科、以下同様）

年度	センター長（学部長） 副センター長（運営委員長） こども学科主任 こども学科長	運 営 委 員
平成 21 (2009)	小林 美和（食） 小椋 たみ子（こ） 南 憲治（こども学科主任）	富安 郁子（食） 三上 貞昭（こ） 松尾 純代（こ） 鶴 宏史（こ）
平成 22 (2010)	小林 美和（食） 小椋 たみ子（こ）	富安 郁子（食） 吉野 佳織（食） 北浦 かおる（居） 三上 貞昭（こ） 松尾 純代（こ）
平成 23 (2011)	勝美 芳雄（こども学科主任）	富安 郁子（食） 吉野 佳織（食） 辻川 ひとみ（居） 三上 貞昭（こ） 松尾 純代（こ）
平成 24 (2012)	村尾 忠廣（こ） 小椋 たみ子（こ）	小林 美和（食） 石塚 理香（食） 辻川 ひとみ（居） 三上 貞昭（こ） 松尾 純代（こ）
平成 25 (2013)	岡澤 哲子（こども学科主任）	小林 美和（食） 石塚 理香（食） 辻川 ひとみ（居） 三上 貞昭（こ）
平成 26 (2014)	勝美 芳雄（こ） 清水 益治（こ） 山本 順彦（こども学科主任）	岩橋 明子（食） 辻川 ひとみ（居） 三上 貞昭（こ） 岡澤 哲子（こ）
平成 27 (2015)	勝美 芳雄（こ） 山本 順彦（こ） 清水 益治（こども学科長）	岩橋 明子（食） 辻川 ひとみ（居）

設立年度である平成 21 年度は、この運営委員会が様々な開設準備に当たった。具体的には、4 月 22 日に第 1 回運営委員会が開催されており、以下の準備が進められた。

- ① センター開設は 10 月 1 日とする。そして、開設までの半年間に、行政や子育て支援機関へのあいさつ、広報リーフレットやチラシの配布、報道機関への告知、事前見学会などを実施した。



図 4 開設時の広報リーフレット

② 「子育て支援センター規定」を、現代生活学部規定として以下のように制定した。

帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター規程

(設置)

第1条 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、地域と連携し、地域住民の子育て支援を推進するとともに、本学部教員・学生の研究教育の場として機能することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、次の事業を行う。

- (1) 地域住民の子育て支援に関する活動
- (2) 公開講座、学術講演会および研究会の開催
- (3) 地域との連携および学外諸団体・研究機関との交流活動
- (4) 研究成果の公表・発刊
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な事業

(センター長・副センター長)

第4条 センターにセンター長および副センター長を置く。

- 2 センター長は、現代生活学部長がその任につき、センターを統括する。
- 3 副センター長は現代生活学部長がこれを指名し、センター長の指示のもと業務を推進する。
- 4 センター長および副センター長の任期は、現代生活学部長がその職にある期間とする。

(センター運営委員会)

第5条 センターの運営に必要な事項を審議するためにセンターにセンター運営委員会を置く。

- 2 センター運営委員会に関して必要な事項は別に定める。

(改廃)

第6条 この規程の改廃は、教授会の議決によりこれを行う。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

本規定の制定にあたっては、本センターの目的が子育て支援の環境整備であるだけでなく、大学のセンターであることを明確にしている。そして、本規程の制定により、目的が明確になりこれに則った事業を展開することになった。

③ 10月以降に実施する事業内容として、子育て親子の交流の場の提供と交流促進、子育て等に関する相談事業、子育て関連情報の提供、公開講座の開催等が検討され、その準備が進められた。

これに加えて、こども学科1期生から、本センターの愛称とそのロゴマークを公募した。その結果、愛称は「まつぼっくり」に決定し、そのロゴマークが下記のように制定された。

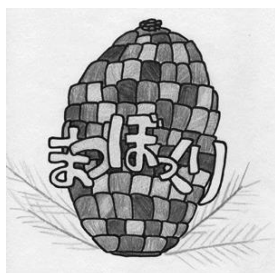


図5 「まつぼっくり」のロゴマーク

(左：こども学科1期生の原画、右：センター入り口のプレート)

3. 地域住民の子育て支援・地域連携活動① —「つどいの広場」—

本センターでは、地域住民の子育て支援に関する活動として、0歳から就学前の乳幼児と保護者を対象にした「つどいの広場」を実施してきた。本センターの施設を開放し、親子で楽しみながら自由に学ぶ機会を提供している。絵本の読み聞かせや手遊びの紹介、子育ての相談に応じることもある。これらの活動のための絵本や玩具も年々充実させてきた。学部の教職員、学生ボランティアも参加している。

表2に示すのが、これまでの実施一覧である。

表2 「つどいの広場」一覧（実施は週1回、午前10時～正午）

年度	実施期間	実施回数	参加組数
平成21 (2009)	1月～3月	6	230
平成22 (2010)	4月～8月	A、Bグループ各4回 計8回	315
平成23 (2011)	前期4月～7月	A、Bグループ各6回 計12回	403
	後期10月～1月	A、Bグループ各7回 計14回	408
平成24 (2012)	前期5月～7月	A、Bグループ各6回 計12回	350
	後期10月～1月	A、Bグループ各6回 計12回	295
平成25 (2013)	前期5月～8月	A、Bグループ各6回 計12回	190
	後期10月～3月	A、Bグループ各10回 計20回	449
平成26 (2014)	前期4月～7月	A、Bグループ各7回 計14回	418
	後期10月～3月	A、Bグループ各10回 計20回	346
平成27 (2015)	前期4月～7月	A、Bグループ各7回 計14回	431
	後期10月～3月	A、Bグループ各10回 計20回	

開設年度である平成21年度は、3か月間6回の実施でスタートしたが、多数の参加があったため、翌22年度から、A、B2グループで実施している。さらに、23年度からは、前後期にそれぞれ2グループで実施し現在に至っている。

表2に示すように年度ごとの参加組数がほぼ安定しており、本学の奈良・学園前キャンパス周辺の子育て支援事業として、定着してきたと言えよう。



図6 「つどいの広場」のようす

4. 地域住民の子育て支援・地域連携活動② —「親子教室」—

本センターが実施してきた子育て支援による地域連携活動として、「親子教室」がある。対象は3歳以上就学前までの子どもとその親で、各回テーマを設け、現代生活学部教員の指導のもと、親子で遊ぶ快さを実感したり、親同士・子ども同士が交流したりしてコミュニケーションを深めてもらうための活動を行ってきた。

表3に示したのが、これまでに実施した一覧である。

表3 親子教室 一覧
(平成21年度は「親子の集い」)

年度	実施日	タイトル	講師	参加人数
平成21 (2009)	10月24日	こどものからだを育む遊び	鶴 宏史 (こ)	8
	11月14日	子どもと一緒に食生活の基本を考えよう	吉野 佳織 (食)	8
	12月5日	子どもと遊ぶおもちゃを一緒に作ろう	松尾 純代 (こ)	15
平成22 (2010)	6月26日	からだをいっぱい動かそう	鶴 宏史 (こ)	37
	8月7日	小麦粉粘土って?一緒につくろ!	松尾 純代 (こ)	31
	10月23日	えのぐであそぼ!	都留 進 (こ)	48
	12月11日	子どもと食生活の基本	吉野 佳織 (食)	22
	2月26日	親子ちょこっと体操	岡澤 哲子 (こ)	42
平成23 (2011)	5月21日	造形活動をたのしもう	都留 進 (こ)	50
	7月2日	作ってあそぼう	鶴 宏史 (こ)	56
	10月22日	からだを動かしてあそぼう	岡澤 哲子 (こ)	49
	12月17日	いっしょにあそぼう	松尾 純代 (こ)	50
平成24 (2012)	5月26日	陶芸にちょうせん!	都留 進 (こ)	82
	6月16・23日	糸つむぎを楽しもう	植村 和代 (居)	75
	7月14日	手作りおもちゃであそぼう	鶴 宏史 (こ)	40
	10月27日	からだを動かしてあそぼう	岡澤 哲子 (こ)	47
	1月19日	ペットボトルで何つくる?	松尾 純代 (こ)	56
平成25 (2013)	5月18日	かみこうさくであそぼう	都留 進 (こ)	56
	6月15日	毛糸であそぼう	植村 和代 (居)	51
	7月6日	栄養バランスはとれたかな? バランス診断ランチョンマットをつくろう!!	天野 信子 (食)	31
	10月26日	元気いっぱい運動あそび ※「なら子育て大学」としても実施	岡澤 哲子 (こ)	54
平成26 (2014)	5月10日	やきものをつくろう	都留 進 (こ)	55
	6月14日	毛糸であそぼう	植村 和代 (居)	43
	7月5日	夏だ! 元気に運動遊び ※「なら子育て大学」としても実施	岡澤 哲子 (こ)	46
	11月8日	はしっこ野菜でぺったん、スタンプ遊び ※「なら子育て大学」としても実施	岩橋 明子 (食)	42

平成 27 (2015) ※全ての 回、「なら 子育て大 学」とし ても実施	5月23日	えのぐであそぼう	都留 進 (こ)	59
	6月27日	切り絵でアニメーション	安井 健二 (居)	38
	8月1日	トマトを丸かじり？あなたも私もトマト博士！	稲熊 隆博 (食)	32
	10月24日	元気もりもり親子遊び	岡澤 哲子 (こ)	30

各年度の各回とも、教員各々の研究を基にした内容で、家庭ではなかなか体験できない内容である。図7のように毎年実施して好評を得ているものに加えて、図8のように新たな講師が展開する初めての内容も加えている。この「親子教室」も学園前地域の活動として定着してきている。



図 7 平成 21 年度から現在まで毎年開催している教室 (左:都留講師、右:岡澤講師)



図 8 初めて屋外での活動を取り入れた教室
(平成 27 年度「トマトを丸かじり？あなたも私もトマト博士！」 稲熊講師)

5. 公開講座の実施 —「こども学講座」—

本センターが、大学に設置した子育て支援センターであることの特徴として、規程第3条(2)に定められている「公開講座、学術講演会および研究会の開催」がある。この具体化については開設時から運営委員会で検討され、開設の翌年平成22年度とその翌年23年度には本センターの公開講座として表4のような「こども学講座」が開催された。

表4 本センター主催の「こども学講座」

年度	実施日	タイトル	講師	参加人数
平成22 (2010)	5月 29日	子どもと音楽	村尾 忠廣 (こ)	26
	7月 17日	子どもの言語発達の過程と獲得の基盤	小椋 たみ子 (こ)	34
	8月 28日	世界の絵本にみる幼児期の子ども部屋の 意味—子どもの自立と空間の役割—	北浦 かおる (居)	30
	11月 13日	子どもの成長と食べることの大切さ	志垣 瞳 (食)	25
	1月 22日	子どもと病気	三上 貞昭 (こ)	15
	2月 19日	子どもの発達の道筋	南 憲治 (こ)	20
平成23 (2011)	6月 4日	保育内容：明日の中身	清水 益治 (こ)	30
	7月 16日	音痴をなおす	村尾 忠廣 (こ)	18
	10月 1日	子どもと公園	辻川 ひとみ (居)	6
	11月 19日	こどもの体とところを作る食	野口 孝則 (食)	23
	1月 21日	子育て支援	松尾 純代 (こ)	11



図9 平成22年度「こども学講座」(左:第1回 村尾講師 右:第2回 小椋講師)

しかし、平成 23 年度には、この講座の受講者が思うように集まらなくなり、受講対象である保護者や保育者の要望に合わせて、講座の内容や開催日時等を検討し直すことになった。

そして、平成 24 年度以降は、より広い範囲の受講者が参加できるよう本学の公開講座として開催することになった。同時に、「なら子育て大学」としても開催することになった。「なら子育て大学」は、保育士養成課程のある畿央大学、帝塚山大学、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部、奈良教育大学、奈良佐保短期大学、大阪樟蔭女子大学が連携し、子育ての不安感・負担感の軽減につながる講座や子育て支援者の資質向上に役立つ講座を「なら子育て大学」として開催しているものである。

さらに、平成 25 年度には、近鉄あべのハルカスとの共催講座も開催した。それらの一覧は表 5 のとおりである。

表 5 共催した「こども学講座」

年度	実施日	タイトル	講師	参加人数
平成 24 (2012)	11 月 10 日	こどもの健康 第 1 部「子どもと病気ー感染症、予防接種、 救急受診についてー」 第 2 部「子どもの体とところを作る食」 ※帝塚山大学公開講座、なら子育て大学として開催	第 1 部 三上 貞昭 (こ) 第 2 部 野口 孝則 (食)	48
平成 25 (2013)	9 月 14 日	※と共催 近鉄あべのハルカス 子どものこころ発達と環境	小椋 たみ子 (こ)	8
	10 月 19 日	子どものとりまく食環境	野口 孝則 (食)	8
	11 月 16 日	子どものとりまく住環境	辻川 ひとみ (居)	8
	11 月 9 日	「こどもとコミュニケーション」 第 1 部「親子が身体で伝え合う事とは？」 第 2 部「親子が音声で伝え合う事とは？」 ※帝塚山大学公開講座、なら子育て大学として開催	第 1 部 岡澤 哲子 (こ) 第 2 部 村尾 忠廣 (こ)	11

さらに、平成 26 年度からは、現代生活学部の全ての専任教員が、前述の「なら子育て大学」の「出張・なら子育て大学」に出張講座のテーマを登録し、市町村や子育て支援関係団体の要請に応えられるようにしている。

このように、本センター主催の公開講座は、取り巻く状況に合わせる形で変化してきた。今後は、本紀要の発刊が大学の責務を果たすことになる。

6. 学生の教育 —こども学科「基礎演習Ⅱ」における「つどいの広場参加授業」—

「子育て支援センター規定」では、第 2 条（目的）に、現代生活学部生の教育の場として機能することが謳われている。これに則って、こども学科 1 年生後期配当の「基礎演習Ⅱ」において、「つどいの広場参加授業」が平成 23 年度から実施されてきた。

この授業の構成は、表 6 のようにまとめることができる^{3) 4)}。

表 6 「つどいの広場参加授業」の構成

事前指導	①子育て支援センター、つどいの広場の説明（5分） ②つどいの広場参加授業の説明（15分） ③参加実習を録画したDVDの視聴（15分） ④参加実習の見学（25分） ⑤指導案の作成（25分） ⑥参加実習にあたっての諸注意（5分）
参加実習	①参加者への紹介（5分） ②子どもとのかかわり（60分） ③終わりの会（10分） ④体験直後のアンケート記入、関わり記録用紙記入（15分） ※ ②の子どもとの関わりでは、ワイヤレスマイクをポケットに入れたエプロンをつけ、子どもと接しながら、指導案に沿って遊びを展開する。その遊びは、隣接する観察室から操作されるカメラによって2つの方向からDVDに録画される。録画時間は、1人の参加者につき5分である。
事後指導	自分の子どもへの関わりかた、遊びを客観的に見るトレーニングとして、パソコンとヘッドホンを使ってDVDを再生し、1分ごとに行動記録を作成していく。
宿題	行動記録を提出報告書の左の欄に清書し、右の欄に、DVD再生を通して自分と子どもの関わり、遊びの設定などについて主観的に考え、今後の課題について考える。

以上のように、本センターの「つどいの広場」を活用し、ビデオの書き起こしをするという方法を用いることによって、子どもの行動を客観的に見たり、自分の関わりを客観的に振り返ったりする力を学生に身に付けさせる教育が可能になっている。

このような本センターを活用した授業を学部で開発することが、今後の課題として挙げられる。

これまで振り返ってきたように、帝塚山大学現代生活学部子育て支援センターは、開設以来7年間、地域の子育て支援、大学と地域連携に大きな成果を上げてきた。今後も、子育て支援の状況の変化に対応しつつ、大学の特色を活かして活動していかなければならない。

引用・参考文献

- 1) 帝塚山大学現代生活学部こども学科設置認可申請書, 10. 設置の趣旨を記載した書類, p.11, 2008
- 2) 大学に全国初子育て拠点, 産経新聞 東京, 2004.6.2
- 3) 清水益治・小椋たみ子・松尾純代・鶴宏史: DVDを用いた子どもとのかかわり記録作成の効果, 帝塚山大学現代生活学部紀要, 第9号, pp.56~57, 2013
- 4) 清水益治・小椋たみ子・松尾純代・鶴宏史: DVDを用いた子どもとのかかわり記録作成の効果Ⅱ, 帝塚山大学現代生活学部紀要, 第10号, pp.127~128, 2014